【第41回】

樟脳（しょうのう）

樟脳は、クスノキの葉や枝などのチップを水蒸気蒸留（製脳、樟脳焚き）して作る「白い結晶」です。血行促進や鎮痛などの作用があり薬として、また衣服の防虫剤としても利用されました。その製法は6世紀にアラビアで発明され、日本へ伝わったのは16世紀とされています。17世紀中頃には、島津藩の特産品として薩摩から欧州や中国へ輸出され、金銀に次ぐ日本の重要な輸出品となりました。『種子島家譜』には、文化3（1806）年「樟脳を吾が地に煮んことを請ふ」と、種子島での製脳に関する記述が登場します。大阪への販路拡大など島内での製脳が盛んになると、島主はクスノキの植林に力をいれ、樟脳山掛を置いて厳しく管理しました。

明治時代になると、禁じられていたクスノキ伐採が自由になり、島内各地で製脳されるようになりました。人里離れた山の中、クスノキ生育地に樟脳小屋を建て、そこに暮らしながら家族と共に作業をしました。中には、クスノキを求めて島外からの移住者も多くいたようです。重労働と極めて質素な生活の様子が、民謡「樟脳節」からも伝わります。

大正15年に種子島製脳業者組合が設立され、昭和5年にピークを迎えます。しかし次第にクスノキが枯渇し、昭和20年の米軍機空襲で製脳圧搾場（西町）が焼失したことを機に、種子島での製脳は衰退しました。今は木々に覆われた樟脳小屋跡が、当時の様子を伝えるのみとなっています。

（文責：文化財保護審議会　会長　奥村　学）



▲今も残る小屋跡の煙突